白壁のうち

小川未明

青空文庫

私は、学校にいるとき、いまごろ、お母さんは、なにをなさっていらっしゃるだろうか、またおばあさんは、どうしておいでになるだろうか、と考えます。すると、おうちのようすが、ありありと、目にうつります。

「ああ、お母さんは、おせんたくをなさって、もう、おわったころだ。」

「いまごろ、おばあさんは、いつもの場所にすわって、眼鏡をかけ、お仕事をなさっているだろう。」と、思いました。

早くおうちへ帰りたいと思っていたので、学校のおわったときは、ほんとうにうれしかったのです。帰りは、たいてい、お友だちといっしょでした。

町を出はずれたところに、お寺がありました。そのお寺の裏は、大きな暗い森になっていました。そこを過ぎると、もうあちらに、私たちの村が見えます。そして、まっきに目にはいるのは、白壁のうちです。

「ああ、なつかしい白壁……。」

そのおうちが、私の生まれた家です。どこへいった帰りでも、この白壁が目にはいると、私は、もうおうちへ帰ったような気がしました。

「また、あとで遊ぼうね。」

おたがいが別れるとき、こういいました。道が、そこから二すじになっていました。

私は、小道をいきました。道の両がわに、かぼちゃ畑があって、黄色な花が咲いていました。くまばちが、みつをさがしに、花の中へはいったり、出たりしていました。頭の上で、日の光が、きらきらとしたが、あちらの青い空には、白い入道雲が、もくもくと出ていました。

私は、赤いほうせんかの咲いている裏口をはいって、元気よく、

「ただいま。」といいました。

すると、やさしい声で、

「お帰りなさい。」と、お母さんが返事をなさいました。そして、にこにこしながら出ていらっしゃったのは、おばあさんでありました。

「暑かったろう、さあ、はやく顔をお洗いなさい。」と、おっしゃって、帽子や、かばんをはこんでくださいました。

晩方、私は往来で、お友だちと遊んでいました。夕日があかあかと、遠く、白壁にうつっていました。

このとき、包みを肩にかけた、ひとりの旅人が通りかかり、つかれたようすで、汗をふきながら、

「ここから浜まで、まだだいぶありますか。今夜、舟に乗ろうと思うのですが。」と、たずねました。

「二里ばかりあります。」と、私が答えると、

「この道を、まっすぐいけばいいのですか?」と、聞きました。

「そうです。つきあたったら、右にいきます。」

「ありがとうございます。」と、旅人はていねいに、頭を下げていきました。

私は、うしろ姿を見送り、「どうか、時間にまにあい、ぶじに舟に乗れますように。」と、旅人のために、心から祈りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「僕の通るみち」南北書園
　1947（昭和22）年2月
初出：「コクミン二年生」
　1946（昭和21）年8月
※表題は底本では、「白壁《しらかべ》のうち」となっています。
※初出時の表題は「白かべのうち」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2020年1月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白壁のうち

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/